

スポーツ映画から見るジェンダー

～Gender in Sports Movie～

1K03B1747 松村慎也

指導教員 主査 宮内孝知 先生 副査 石井昌幸 先生

序章 (本研究の動機・目的・方法)

私たちの生きる社会がどのように性別によって構造化されているのかを歴史的に見ていくこと(ジェンダー)は、私たちがもつ思い込みを覆していくことになると考えた。さらに、近代スポーツにおいてはスポーツとジェンダーは切り離せない問題であり、スポーツの世界で様々なジェンダー問題が取り上げられているのである。

しかし筆者自身は、経験してきたスポーツの現場で、ジェンダーの問題を実際に感じたことが無い。そこで、スポーツにおけるジェンダーの様々な問題が本当に存在しているのか、または、どれほど存在し、これに対して人々が実際どのようなイメージを抱いているのかを検証する。本論文では、女性のスポーツ参加率や競技数の変化などのデータを、スポーツ映画と照らし合わせて、ジェンダー問題の本質に迫っていきたい。

第1章 ジェンダー論

ジェンダーは、社会や文化が作り出したものであり、生物学的な性のあり方である「セックス・sex」に対して、文化的・心理的・社会的な性のあり方を意味している。

第2章 先行研究

本章では、様々な角度から、スポーツの世界におけるジェンダー問題を捉えていく。これまでどういう研究がなされてきているかを知ることができ、ジェンダー問題に対して多角的に捉えることができるようになると考えた。

その結果、スポーツにおけるジェンダーの問題は、スポーツ自体に存在するというよりは、スポーツを取りまき、スポーツに影響を及ぼすものにある、ということが明らかになった。また、社会の風潮が、スポーツ界におけるジェンダー問題にも大きく影響している。これを理解しなくては今後の問題解決には繋がらない。その中でも特に、人々に影響を与えるメディアが、ジェンダーの問題にこれからどのように立ち向かっていくのが重要なポイントであると考えた。

第3章 第4章 映画で見るジェンダー

本章ではスポーツ映画(プリティ・リーグ、1992)と(ミリオン・ダラー・ベイビー、2002)を比較し、映画の中に描かれているジェンダー問題の本質に迫っていく。

プリティ・リーグの舞台は1943年。この時代のスポーツは度重なる侵略戦争の影響を大きく受けている。同様に、

このプリティ・リーグも、多くのメジャー・リーガーが戦地に行ってしまったため、その間盛り上げるために結成された女性だけの野球リーグである。

この映画では、様々なジェンダー問題が随所に描かれている。女子野球リーグの入団が決まった選手には「レディになるためにマナー教室に通ってもらう」ということを伝え、実際に女性のマナー教室に参加させている。このシーンでは、スポーツをする前に「女らしく」なる必要があるという考えや、男性と同じようにスポーツをするだけでは魅力的な女性にはなれないという、ジェンダーに対する考えが顕著に表れている。

しかし、そのような状況の中でも、スポーツに熱中する彼女たちの姿に、いつしか周りの人々の態度や考えも変化していく。野球というスポーツの魅力の前には、つくられた「男らしさ」「女らしさ」というジェンダーは簡単に崩壊してしまうことが明らかになった。

一方、ミリオン・ダラー・ベイビーでは、田舎出身の女性がプロボクサーとなり、世界チャンピオンを目指す。当初女性がボクシングをすることに誰も賛成をしなかった。しかし、プリティ・リーグの彼女たちとは明らかに違う点は、反対する人が多くいようと女性がボクシングをする環境はあったということ、また、彼女がボクシングをする姿に、男女問わず熱狂的に応援していたことである。この時代になると、明らかにジェンダー・フリーの世界が広がっている。

終章

女性の参加率や競技数の変化などを見る限りでは、女性スポーツが男性スポーツと肩を並べるようになり、スポーツにおけるジェンダー問題は解決されつつあるように見える。しかしその現状は、数字だけでは見えないジェンダー問題が、未だスポーツの世界に存在している。

一方で、時代の変化とともに、一步一步ジェンダー・フリーの世界が広がっていることも確かである。

最後に、筆者自身はスポーツ界がジェンダー・フリーの世界になることを望んでいる。そのためには、スポーツをしている人だけではなく、社会構造や筆者を含め一人一人の意識が、最も必要であるのではないだろうか。多角的な視野で、立ち向かっていかなくてはいけない。